実践レポート

児童が理想の自分に近づくことを後押しするために教師ができること

-子どもに寄り添い、伴走し続ける道徳科の授業を通して-

高松市立中央小学校
教諭　　篠原　弘樹

1　はじめに

毎年、年度始めに、学年末の姿を思い描き「理想の自分」として目標を設定させる。しかし、いつも曖昧な終末を迎え、子どもに学びの深まりを感じさせられない。この現状を改善し、今年こそ児童を理想の自分へ近づけるために、子どもたち一人ひとりに寄り添い伴走し続ける実践をしようと決意した。

2　実践の内容・方法

（１）実現のための具体的方策

子どもたち一人ひとりに寄り添い伴走し続けるためには、図１に示したように、①児童に理想像をもたせ、②学びを促す教材を準備して授業を行い、③児童が学んだことを生かせるように、授業後も教師が意図的に関わり、④変容を評価し、振り返りを促すという４つの過程が必要だと仮説を立てた。ここでは、特に児童の変容がみられた道徳科の授業について述べる。

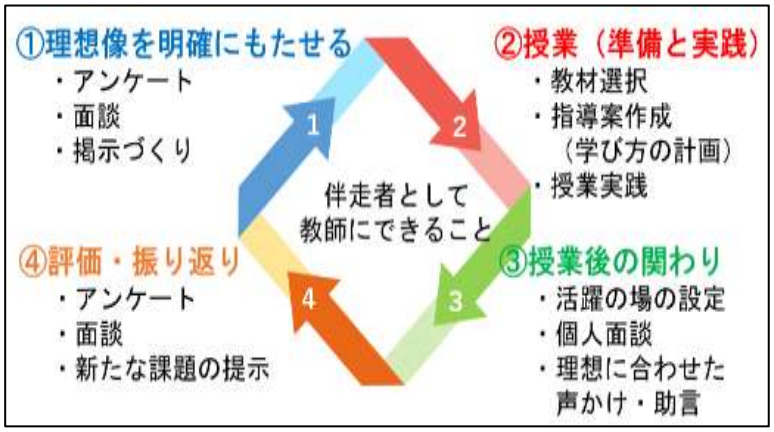

図１　伴走者としての教師の役割（仮説）と方策

まずは、子どもたちの理想を明確化するためにアンケートを取り、それを基に一人ひとりと個別に面談を行った。その後、一人ひとりの「理想の自分」を書いた掲示物を作成した。掲示を見た児童の発案で、全員の理想を分類すると、７つのグループに分けられた。そこで「みんなが付けたグループ名は、何かに似ていないか」と揺さぶると、「道徳科で学ぶ内容に似ている」という反応が返ってきた。

子どもたち一人ひとりが理想に近づくためには、それぞれの理想に対応した学びができるように工夫する必要がある。そのためには、これまで行ってきた全員共通の内容項目を捉えるだけの道徳科では効果的でないと考え、７種類の理想に対応できる７つの教材を用意することにした。そこで、教科書にある３５教材の中から人物の生き方について考えることができる７つの教材を選び授業を行うことにした。

また、本学級の子どもたちの学び方を分析すると、自己内対話を通して納得解を得ようとする「自己内対話重視」の児童と、友達等との対話を通して納得解を得ようとする「交流による対話重視」の児童の、大きく２つに分かれることが分かった。これまでは、全員が発言する話合いを求めてきた。しかし、学びの深まりという観点で考えれば、自分の得意な対話の形で自己の考えを深める方が効果的なのではないかと仮定し、授業の中でこの２つの学び方を選択できる場面を準備することにした。

児童らの理想の自分に合った教材の選定とそれぞれの理想グループ内での学び方の実態は、次の表１に示す。

理想の自分		挑戦する自分	みんなのために働ける自分	やさしくできる自分	誰にでも平等に接する自分	頼られる自分	きまりを守れる自分	責任感をもつ自分
学び方	自己内対話重視	1,2 ※番号は児童を表す	5	8,9	12,13,14,15	18	22(B児),23	25,26,27
	交流による対話重視	3(A児),4	6,7	10,11	16,17	19,20,21	24	28,29
選択した教材		市民に愛される動物園を目指して	幸せをいのって織るじゅうたん	おばあちゃんの指定席	どれい解放の父リンカン	ロレンゾの友達	どんな心が見えてきますか	のりづけされた詩
内容項目		A-5希望と勇気、努力と強い意志	C-14勤労、公共の精神	B-7親切、思いやり	C-13公正、公平、社会正義	B-10友情、信頼	C-12規則の尊重	A-2正直、誠実

表１　児童の理想を基に、分析し、選択した教材

実際の授業では、最初に「これから、みんなの理想にきっと影響を与える教材を７つ学習する。最後に自分の理想に合う教材を１つ選んで欲しい」と伝え、７つの教材を１時間ずつ順番に学習した。その際、教材ごとにターゲットとなる児童を決め、その児童が自分の理想について深く考えることができるように、中心価値を定めた。

７教材の学習を終えたのち、８時間目では、一人ひとりの児童が選んだ教材を基に自己の生き方について考える１時間を設けた。友達との対話や自己内対話を通して、子どもたちは「理想の自分」に対する考えを深めていった。

さらに、授業後には、「理想の自分」に近づくために、一人ひとりに合った活躍の場を設定するとともに、個人面談や声かけを通して、個に応じた支援を行うようにした。

（２）取組の具体

ここでは、表１に示したＡ児とＢ児の２名を取り上げ、実践の具体を説明する。

「みんなに頼られる自分」を、友達との交流を通して追求したＡ児

面談では「僕は、みんなのように頼られたい」と訴えた。頼られるために、何が足りないと思うかと尋ねると「頼られようとする努力をしていない」と答えた。そこで、「どんな努力をすれば頼られるのかを探ろう」と助言した。面談を通して、Ａ児が求める姿が、信頼される自分よりも努力できる自分だと気付くことができた。

図２　児童が交流した際の発表ボード

Ａ児に合う教材は、努力し続けた人が描かれた教材がよいと思い、教材「市民に愛される動物園を目指して」を計画に組み込んだ。授業でＡ児は「努力とは、積極的に行動することだ」と考えた。Ａ児は、友達等との対話によって学びを深める児童だと分析していたため、「同じ理想をもつ人と話してみよう」と助言した。すると「頼られる人は、利益を求めずに動いている。僕も利益を求めず、みんなのために動こうとする努力をしてみよう」と考えを改めることができていた。図２は、Ａ児のグループが対話を通してつく

った発表ボードである。

その後、ボランティア清掃、委員会でのプレゼンの企画など、自分ができる行動を積極的にしようとする姿勢がみられるようになった。A児は、学年末のアンケートで「結果が出なくとも、自分が正しいと思ったことをし続ければ信頼される」と記述した。ただ、A児は頑張ろうとするあまり一人よがりで実践することが多かった。委員会のプレゼンづくりにおいても、プレゼン枚数が多くなることがあった。そこで「見ている人のことを考えると、スライドやアニメーションの量は適切か」と相手を意識するよう助言した。そうした関わりを続けた結果、卒業時には「中学校では、みんなのことを理解することで、今より信頼される自分になります」と新たな目標を立てていた。

「だれかのために動ける自分」を、自分と教材の自己内対話で追求したB児

面談では「自分のことを優先せず、みんなのことを考えた行動ができるようになりたい」と話してくれた。そこで、みんなのことを考えた行動について詳しく尋ねると、きまりを守ることの大切さを語ってくれた。

正義感の強いB児は「きまりを守る＝みんなのため」と考えていると思い、教材「どんな心が見えてきますか」を組み込んだ。さらに、B児は自己内対話によって学びを深める児童であったため、同時期に学んだもう１つの教材「小川笙船」を関連付けて考えるよう助言した。すると、２教材を関連させて「だれかのために行動すると、その人は喜んでくれる。すると、自分も嬉しくなる。つまり、だれかのための行動は、自分のためにもなるのではないか」と考えを深めることができていた。

そこで、学んだことを実践してみようと話した。まずは、委員会の５年生を助けてみようかと具体的に提案した。すると、B児は自分の仕事があっても５年生に声をかけたり、やってみせたりできるようになっていった。その時の表情はいつにも増して満足しているようだった。

しかし、本人は自分がしていることに自信がもてていないようだった。そこで、B児の行動を写真に撮り、学級で紹介した。周りの児童からの称賛もあり、B児は学年末のアンケートに「だれかのために働くことが、楽しくなった。だれかが喜んでくれるとうれしい」と記述するなど、理想の自分への手ごたえを感じるようになっていた。

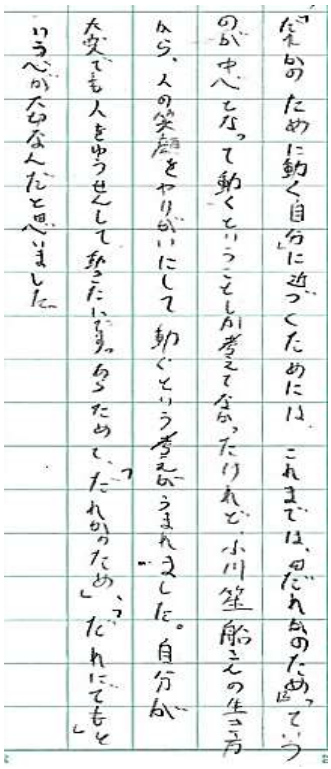

図３　授業の終末にB児がかいた振り返り

３　実践の成果

２（１）で述べた４つの過程は、児童の成長に大きく影響を与えると改めて感じた。実践によって得られた成果を３つ述べる。

（１）教師としての成果

一人ひとりの理想像を明確にもたせることで、指導の一貫性が保てた。どの教育活動においてもそれぞれの理想像を意識することで、助言がしやすくなった。また、意図をもった授業ができ、授業の質的向上にもつながった。さらに、保護者に目標や状況を具体的に伝えることで、保護者とも目標を共有することができ、連携の取れたよい関係が築けた。

（２）児童自身の成果

「①理想像を明確にもたせる」過程を大切にすることで、児童がしたいことや考えていることが明確になった。それに合わせて、教材選択や学び方を工夫することで、主体的な学びにつながった。さらに道徳科での学びと実際の生活場面を結びつけて考える機会も多くなり、児童は自己の成長をより強く感じられていた。

（３）学級集団の成果

さらに、集団としての成長もみられた。互いの理想を意識し合うことで、応援し合ったり、高め合ったりする関係になり、居心地のよい雰囲気が自然と生まれた。

４　普及させたい取組と期待される効果

児童が理想の自分に近づくことを後押しするために教師ができること、それは、正確な実態把握を基に、一人ひとりに適した場の設定を行うことである。

２（１）で述べた４つの過程の中でも、特に「①理想像を明確にもたせる」過程は、児童との対話が必要であり、最も時間と労力がかかる。しかし、児童の実態を正確に把握することは、教師として最も重要な役割である。その際、教師の主体的で対話的な関わりを通して児童と理想像を共有することで、児童の願いにそった助言が可能になる。正確な実態把握なしに、一人ひとりを成長させることは、難しい。

今回紹介した道徳科の実践は、７教材を扱うという大変複雑な授業となった。しかし、本提案の主旨は、７教材を扱うことではなく、目の前の児童の実態に合うように主題を設定すると７教材になったという点である。本年度担任している３年生では、多くの児童が「友達との関わり」に課題をもっていた。児童が目標とする友達との関わり方を調査し分類すると大きく２種類に分けられた。そこで、その２種類の関わり方について考えられるよう２つの教材を基に「友達との関わり」を探る主題を構成した。

このように、児童の実態を把握し、学びを促す教材を準備し授業を行うことが何よりも重要である。そうすることで、児童一人ひとりが自己の成長を実感できるとともに、その成長を教師も児童と共に喜び合うことができると考える。

５　課題及び今後の取組の方向

先に述べたように、一人ひとりに寄り添うことには、多くの時間と労力を要する。実態把握をいかに効率的に行うかを考えたい。

また、６年生では理想の自分に課題意識をもつことはできたが、本年度担任している３年生の発達段階では、理想の自分に課題意識をもつことは難しく、友達に関わることなど児童にとって身近なことに対する課題意識にとどまった。この３年生から６年生の間の学年で発達段階に応じて課題意識がどのように変わっていくのか、さらに、教師がどのように気づきを促し授業をつくっていくべきなのかについて、今後さらに探っていきたい。

参考文献

香川県小学校道徳教育研究会(1995)．新・道徳学習の理論と実践．松林社.
香川県小学校道徳教育研究会(1998)．「生きる力」を育む道徳授業．松林社.
香川県小学校道徳教育研究会(1999)．総合的学習と連携を図る道徳学習-新教育課程の構想と実践-．明治図書.
齋藤　嘉則(2021)．教師のための教育学シリーズ８道徳教育論．学文社.